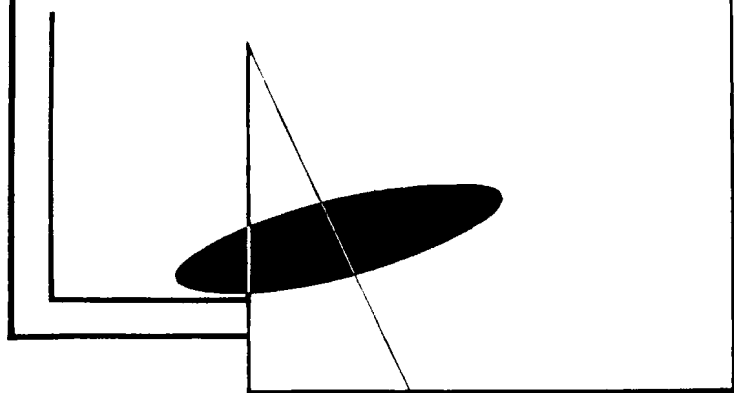


豐榮郎二
船保好下
眞久三木
十順
集

現代日本文學全集

50



筑摩書房版

眞久三木 船保好下 豐榮郎二 集

昭和三十一年九月十日 印刷
昭和三十一年九月十五日 發行

著者

眞久三木 眞久三木 眞久三木
船保好下 船保好下 船保好下
順十 順十 順十
二 二 二

發行者

古田 晁

印刷者

多田 基

發行所

筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版 株式會社 精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 美行製本有限會社

眞船 豊集 目次

鼬（いたち）……………五

裸の町……………三

見知らぬ人……………五七

遁走譜……………八〇

久保 榮集 目次

火山灰地……………一五

三好十郎集 目次

おさの音……………二二

獅子……………二四六

胎内……………二七三

木下順二集 目次

彦市ばなし	三二
夕 鶴	三八
蛙昇天	三九
眞船豊論（吉田健一）	三九
久保榮小論（佐々木基一）	四一
三好十郎論（荒 正人）	四六
木下順二小論（加藤周一）	四〇
解 説	四五
年 譜	四〇

装幀 恩地孝四郎

眞船
豐集

自
記

一五二

[illegible]

員 勉 用 紙

吾市人を知らう

知つてゐる。幸中、
刺す。

22
22

聽 (いちち)

萬三郎 (阿母)
 おかしま (妹)
 おとし (萬三郎の叔母)
 喜平 (百姓)
 彌五 (馬車ひき)
 山影先生 (馬醫者)
 古町のかか様 (女地主)
 伊勢金のおかみ
 お咲、お君 (おしまの娘達)

東北地方、鐵道から五六里離れた、ある舊街道に沿うた村でのこと。

第一幕

だるま屋萬三郎の家。

くすばけた汚いだつ廣い家の中。中央に黒びかりした大黒柱。その右手は疊敷の間。

そのまた右手表座敷に行く格子戸。その正面は奥の間への格子戸。左手は勝手板間。大きな切燵。その左手は平土間。馬のひない廐が半分程見え、廐の二階は物置と鶏の寝場所。瀬戸と街道に向いた二つの戸口。疊はみなはがして大黒柱に立てかけてあるし、あたりに古ぼけた長持だの、つらなと引出してあるし、すべてたたみかけた家のありさま――

爐端に、おしま (三十二三歳) があぐらをかき、獨りで焼酎をあふつてゐる。傍に、おかじ婆さん (六十七八歳) がぢつと坐つてゐる。衰へた陰氣な女。

おしま おれが買った酒を、おれが飲むに、お前が文句をつけることアねえよ、しやらくせえや。

おかじ にしがさつさとこの家を出て行つたら、おらも文句を言はねえわ。そのざまは何んだよ。びたいぐらなどかきやがつて、人も來てゐるこつた、外間が悪くつて、おら顔から火が出さうだ。何しにこき歸つて來ただ。

おしま おれがどこに來ようとお前の指圖は受けねえよ。お前だつて、今日から、このだるま屋にやおさらばぢやねえか。え？ 外間もくそもあつたもんぢやねえわさ。――え、喜平の底抜け樽ウ、何をいつまでぐづぐづしてやがんだ。(奥へ向つて) おうい、喜平さ、やい、早く來て相手をしねえか！

喜平の聲 (奥で) この女！ 喧しいぞ、一丁前に飲めもしねえで。大口たたいてゐるつか……！

おしま 何だつて！ この百姓！ 水呑み蛙のくせに、ひとを子供扱ひにしやがつて……。

野郎！ おれは板倉組の山城兄貴の女房だぜ。手前ら、ど百姓とア飲み口が違ふんだ。畜生奴、(喜平のへへと笑ふ聲) やい、笑ひやがつたな、相手をして見ろ！ 早く出て來い！ 喜平 ま、黙つてゐるで……いま大事な、調べごととしてるだ。先生の決めてからだで……。

おしま 調べ事だ？ ちエツ、笑はすねえ……！

おい馬醫先生、髯男！ いい加減にしておけ！ ひとの家の疊まで、ひつべがしやがつて、お前さんなんざ、いい顔見せたら、廐の馬ぐそまでさらつて行きやしねえか！

山影が奥でこれ聞きかね、コホンと咳をする。

おかじ おしま、うぬは直ぐ出て行くだ。さ、親不孝の渡り者は出て行くだ。

おしま なんだ、その火ばしで、おれを打つ氣かい。まアさうくさくさするなつてい。――

ええ、婆アの陰氣な面ア見てゐちや酒もうまくねえや。お前もこの家を追ん出されたら、愚痴はこぼさなくならアな。宿無しのほうろくさ、へつ、おいらと同組だよ。(奥へ行きながら) やい、喜平の底ぬけ！ (奥へ去る)

古町のかが様が戸口から入つて來る。

古町 片がついたなえ。

おかじ はえ、おかげさまでなアし。昨日は、ほんにはア御無理願ひやした。長いことお金借り申して、あんなことでは濟まねえでがんです……おらはアこんな目になつてやすで、どうかはアあれで勘辨してくんなしよ。

古町 なにおらの所はどうでもよかつたんだげんどな、まアたつて喜平さが言ふもんでな。……お前もほんに苦勞するわ。あんまり力落さんなよ。その内には、南洋から、いいたよりが来るわえ。

おかじ (不機嫌に) なアに、夢話したわし……萬三郎のおかげで、おらひとり、たうとうこんな目にあつてしまひやした。野郎が出て行つて、こんど三度目のお盆だわし。あの野郎もどんな目にあつてゐるか、分つたもんでねえのし。

おしまの聲 (奥で) どうせこの世は癪のたねさ。な、さうぢやねえかい、鬚の先生、なアに、おれの亭主が監獄へ入つたからつてめめそするこつちやねえんだ。(へへへと喜平の笑ふ聲)

古町 また、おしま酒のんでるだなえ……

おかじ 朝つからくらつてゐるのし。

古町 婆さま、(小聲で) 亭主が人殺して、牢さ入つたつてほんとかえ?

おかじ 罰あたりだわし。歸つて來せえしなけりやいいに、ああして子供二人も連れて、ちよくらやつて來やつてなし、酒をくらふとああして亭主の人殺しを、自慢にしてけつつか

るのし……悪い時は、何んでも悪いことが續くだわし……

古町 なんてなア。土方衆は命知らずだで……

おしま、喜平、馬醫者の山影が爐端に來る。喜平 そんぢやアなんぼお前が氣丈もんだつて、その町に居るわけには行くめえよ。

おしま 莫迦言ふな。何も強盜や強姦で人を殺したわけぢやねえぜ。お前のやうな田んぼのもぐらもちにや納得出來めえが、おれの亭主の山城は、仲間同士の義理合でやつつたんだ。大自慢だ……へつ、仁義つてもんを知つてるかい?

喜平 なんせ、おつかねえこつさ。

おしま ちよつ、まアいいや、一杯やれよ。おらの亭主は酒が好きだよ……。おい、先生、さうじろろ見なさんな。おいら、産氣づいた牝馬ぢやねえぜ。さ、おれの酒だ。飲まんしよ!

山影 (下を向き、てれかくしに咳をし、應病さうに低い聲で) 僕は……好い……(と手で制する)

おしま オツホン! (咳の眞似をし) お上品だアよ。土方風情の女ぢや、つき合へねえとよ。だが先生、金なら、お前は鍋のつるでも

しやぶるつてんだらう。

喜平 ヘツへへ、流石の先生も、この女にかかつたら、顔まけだア……

おしま うるせい。手前なんぞ、飲むだけが取柄ぢやねえか。(古町に) ——あれ、これは

珍しい古町のかか様。

古町 (あわてて) ああ、おしま、お前も、まアすつかり變つたなア……

おしま それよりやこの村は大變りだねえ。早えとこ、おれの兄貴の三ぶは、金貸共に追ひたくられて南洋まで夜逃げしちまつたし、阿母はてんでまうろくしちまつた。だるま屋の家屋敷アくそ蟲共がよつてたかつて、この通りだ……。だけれど、お前様はちつとも變らねえわ。ちつと白髪が殖えて、腹が出張つて、父無し子の代りに金が溜つた位のもんだらうよ。(みな顔を見合はせる)

おかじ おしま! このがき! (火ばしで打つ) 喜平さ、連れて行つてくろろ!

喜平 さささ、おい、一休みしろよ、な、また晩におらと飲み明かすべえ……な、寝ろや。

おしま おや、この野郎、おれを手ごめにしようてえのか! へつ、面と相談しやがれ、どん百姓に氣を許すおしまぢやねえぞ! こいつ! (と喜平の頬を打つ)

喜平 この餓鬼ア手に負へねえ!

おしまは喜平の手を拂つて、呷鳴りながら戸口から出て行く。山影が長持に首をつつ

こんでがさごそさせてゐる。

古町 いやはや、ひでい女子になつたもんだなア、婆さま。あの惡たれはどうだま!

おかじ 罰あたつてゐるのし。……土方とくつて、家を飛び出しやつた女だかんなし……

喜平 のだが、好え姐御つ振りになつたで、へつ。なア、先生……

山影 ふん……

喜平 どうだ、先生、あの暴れ馬馴らして見たら、また、別の味だべ？

山影 クスン！ 莫迦。

喜平 先生の腕でも駄目かな。食ひ殺されるかな。へへへ……

古町 これ、バカ言つてゐねえで片つけたらどうだに……

喜平 おつ、かか様、襖六枚と屏風一挺届きやしたか？

古町 あア、貰つたぞい。

喜平 へえ、そんでみんな片つきやした。いろいろ御心配かけやしたが。今、山影先生のとこが決つたのし。馬一頭と、疊十二枚で我慢して貰ひやした。

古町 そか。他人はどんな工合になつたか、おらも、見に來たとこさ。

おかじ ほんにはア、どこさも迷惑かけて、こんなこんでは済まねえことを、よく、おらを面倒見て下さつたで……

喜平 婆さま、伊勢金で取りに來ねえな、あそこさ疊十二枚届けたら、そんでアお決りだ。

先生、大丈夫だな。何しろ、あのかか様が昨日來て、ちゃんと調べて決めて行つただかな……？

山影 なアに、分るもんか……

喜平 いや、あのかか様と來たら、氣をゆるせ

ねえだぞ……。おら知らねえ、先生がするこんだから……

表座敷へ去る。大聲で伊勢金のおかみを呼ぶ。

古町 何をしただえ、先生。

山影 クスン！ いやなに……

おかじ 先生が伊勢金で決めた疊を、運んでしまつたのし、先生の分が古かつたもんで……

古町 (うす笑ひして) 悪いことをするよ、この人は……

山影 …………… (長持から古びた銃を引張り出していぢくる)

喜平 (戻つて來て) そいつはいけねえだよ。おらが貰つて、長持さ入れておいただから。

山影 ほほう、これは珍しいもんがあるよ。ヤーゲル銃つてもんだ。

喜平 何でもいいたから、入れておいてくんせ。先生がこれは珍しいと言ひ出したら、みんなかつさつて行かれるだ。

山影 君はこれ何んだか知つてゐるのか。兎でも撃つ氣かい、この錆だらけの鐵砲で……

喜平 なに研いたら、役に立つだよ。

山影 うむ。ヤーゲル銃に間違ひない。僕は町で戊辰戦争の遺跡保存會を見たことがあるが、これは會津兵がその時使つたもんだ。——これは面白いもんが手に入つた。

喜平 ええ、止めつせえで……

山影 君が持つてたつて何になるかよ。これは學問の役に立つもんだ……

喜平 いいだよ。そんならおらの名で學校さ寄附するだ……

古町 そんな珍しいもんなら、ほんに學校さ寄附するといいなア、喜平さ。

山影 まア…… (低い聲であいまいに) うん、ちよつと、おら、あづかつて、よく調べて見る……

喜平 先生、おらの名で學校さ……

山影 コツホン！ 婆さま、役場の記録によると、當時この村に御本陣があつて、このだるま屋は家老さまの御定宿だつたさうだ。そんなものが残つてゐるだな。(としつこく長持に首をつつ込む)

喜平 ええ、もう何も残つてゐねえんだよ！

古町 へえ……婆さま、この家も、そんな豪勢な時も、あつただもんなア。(と家を見渡す)

おかじ (無感動に) なアに、おらが嫁に來た時分は、この家は借金だらけで、田地も何人も人に取られて、つぶの百姓だつたわし、——あとは何もおら知らねえだ。

伊勢金のおかみが入つて來る。

伊勢金 婆つばア、お盆で店がせはしくつてな……古町のかか様、済まつたかし。

古町 はえ、なにおらのとこの貸金なんて、ほんの眞似かしだで……

伊勢金 おらだつてさうし、たつた疊十二枚でまけただから。喜平さ、見ねえたつて直ぐ運んでくれたらよかつただよ。

喜平 いや、一應はお母様に來て貰はねえとな、

おらの責任がたたねえだで……

伊勢金 (上つて疊を調べ、急に顔の色をかへる) これがおらのとこのかい？

喜平 (山影をチラと見ながら) あ、お前さまのとこのだけ、ここにあるだが……

伊勢金 (いよいよ不機嫌に) 喜平さ、こんなのはおらが決めた疊でねえだぞ。

喜平 (困つて) ……さうかし……

伊勢金 さうかしつて何だ！ お前が決めたでねえのか！

喜平 へえ…… (山影を見るが、山影知らん顔してうつむいてゐる)

伊勢金 おらのほかに疊を持つて行つた人は誰だえ？

喜平 へえ、そのう、山影先生んとこさ……

伊勢金 山影？ (山影に) 何だま！ お前そこゐて黙つてゐるだな！ 人を馬鹿にして、

お前が持つて行つたんだべ？ さうでねえのか？ え？ 魂消した男だよ。人の決めた品物をしやアしやアとして、わが家さ運んだもんだ。

だ。そんでは泥棒だ。お前何も言へねえだ。な。寄るとさはるとゴマばつかりして……人は知らねが、おらはさうは行かねえだぞ。見つせえま、婆つばアも古町のかか様も……

古町 ……

おかし 申譯ねえだ、勘辨してくんなんしよ……

伊勢金 なに、お前の知つたことでねえさ。みんな、この髭の旦那と喜平さのゴロ仕事さ。

だるま屋の整理でありますなんて、この男達ア婆さま一人だまかして、どんなことをやつてゐるか分つたもんでねえだ……喜平さ、お前この男に何ば貰つたえ？ 飲むばつかりが能でねえだぞ！

喜平 へへへ、いや何もかか様にかかつてはおらア臺無しだア、ちよつくら間違えただで……

……

古町 ほんにし、先生も、別にごんたんあつたわけでねえだべから……

伊勢金 ごんたんあるとも！ 大ありし……見つけえ、ああしてしやアしやアとして、何を考へてゐるか分つたもんでねえだから、ちやんとおら知つてゐるだわし。これが役場の收入役をしてゐる旦那だ。どんなことをしてゐるか、おつかねえこつた。喜平さ、とにかく

おらこの疊は受取らねえだからな、話をつけてえなら、眞當にしてくんろ。——婆つばア、おら決してお前を困らせるんではねえだぞえ、おら始めつから、お前には、貸金など返して貰はねえでいつて言つてゐるだ。それを喜平さが、まア氣持だけだから疊を取つてくれと仲に立つて言ふから、それでは、せつかくだから十二枚約束したもんだ……それを、

いいところだけすりかへて、己ればかりうまくやるなんて、その乞食根性が腹立つた。何

ば、だるま屋に大金貸したか知んねえが、いい氣になつてあんまり旦那面しねえもんだぞ……(さつさと去る)

喜平 ほうら見つけえ！ んだからおらが言はねえこつてねえだぞ、先生……

古町 氣の強いかが様だなア…… (山影に) ほと、何にもお前さんは言へねえだ……(うす笑ひ)

山影 (てれかくしに咳をして、ぼそぼそ言ひながら、銃をいぢつてゐる) ……

喜平 へつ、あのかか様にやりこめられねえ人は、この村中にゐねえもんさ……さ、先生、

あの通りだ、しやうがねえで、こつちの古疊で我慢して貰はんなんねえよ……

おかし どうか、はアこんで、こらへてくんなんしよ、先生……

山影 (むつとりして、また、つづらをかき廻しながら) しやうがねえ……

喜平 こんで一切手打は済んだと……え！ 先生、そこはガラクタだけだよ。もういいでねえかよ、お前さんは奥の間さあんなに、山ほどさらつてゐるだから……あの床の置物なんど大したもんだ……

古町 (聞きとがめて) あれ、馬と疊のほかに、まだ山影さんの取り分あるのかえ！

喜平 (あわてて) いやいや。その分はまた、そのう違ふだで……

山影 (ニヤニヤしてゐる) ……

古町 なんだかお前さん達は、油斷がなんねえ……伊勢金のかかさんが言ふ通りだ……(不機嫌になり) おら女子で押しはきかねえだ

が、おらの取前で、ほかのひと歩の合はねえ

やうなゴマカシ仕事は、承知出来ねえだぞ、
喜平さ……人を見くびつてあんまりだぞ！
喜平 とんでもねえ、かか様、お前さんまで、
伊勢金のかか様のやうになられては、おら立
つせがねえだ……

古町 お前は口八丁手八丁で、あの山影さんの
手下だでな。おら達に隠して、また先生が何
か持つて行くなんて、あんまりそんで……
喜平 いや、決してそんなことでねえだ……そ
れお前様のところは数は少なえだが、あの屏
風だつて御家老様のお宿りの時に使つた、い
はばだるま屋のたつた一つ残つてゐた、賣物
だで……

このゴタゴタ話の間、おかじは急いで瀬戸
口を開ける。鶏が喚きたててゐるのである
——
おかじ こらつ！ 何に魂消した。馳でも來や
がつたか！ 畜生！ 犬だな！ ほうツ、こ
の野良犬奴！（何かを打つつける）トトト
トウ、はいれ、ほう、犬奴らに脅かされるわ
……

鶏を土間に入れ厩の二階に追ひ上げる。
この時、戸外に馬車の音が止まる。高聲や
笑ひ聲。
やがて馬車ひき彌五が、瘤高い聲で喚きな
がら入つて来る。

彌五 婆つばア！ 婆つばア！ 珍しい人が來
たぞう！ 誰んちゃと思ふ？ あ？ 思ひが
けねえ人だぞ！（急ぎ戸外に去り）さあ、

下りろよ、お母ア！ どつ！ こん畜生……
なに？ 下駄か……待つた、待つた。
喜平 はてな……おとりみてえな聲だが……ま
さか、おとりが来る筈もねえな？ 婆ア……
……？

おかじ（爐端で顔色を變へ）……來たかも知
んねえさ。あの畜生は何でも喚きつけるだ……

古町（戸口へ行き）あれ、ほんにおとりだぞ。
婆さ……來て見つけよ。へえ何んて變つた
かまア……まるで町場の奥様みてえだよ。あ
れが、おとりだべかア……へえ！
喜平 へつ、なアるほど、間違えねえだ。あの
輕尻のおとりがなア……ほう、でけい腹アつ
ん出して！ 畜生金でも溜めやがつたかな
ア！ 昔の面影はどこにもねえぞ。おつ、び
かびかしたもので着てたら……豪勢な面して
やがる……こいつはただごとでねえわ……

この間に戸外で一段高いおとりの笑ひ聲が
する。近所のものに取巻かれてゐる様子。
古町と喜平は戸口にそはそはしてゐる。山
影とおかじは爐端にちつとしてゐる。
彌五のはしやぎ切つた高聲がする。「サア、
みんな、話は今夜にしつせい。お客さまは、
くたびれてゐるだ……小母ア、早く家さ入
んねえかよ！」

おとりと彌五が入つて来る。おとりは目の
鋭いきつい五十女。常にあけすけと傍若無
人に高話をする癖がある。

おとり やれやれ、やつと家へ着いたよ！ な
アんてお前の馬はへのろいかよ！ 停車場か
らここまで来る暇に、も一遍上州へ逆戻り出
來つちまふよ！ アツハハハ。

彌五（熱心に）だでよ！ ぜんそく馬だで
よ！ 小母ア、さつきもおら言つたがよ！

おら、あの馬さ五十兩ぶつたら、それ、とつ
てもいい馬が手に入るだがな……？ 掘出し
馬だ。そいつは……な、たつた五十兩でよ！
おとり 手に入れたらよかんべ。

彌五 そ、それが、お前……小母！ そ、そこ
だよ……ここにその五十兩……たつた……な
ア小母ア……（とおとりに取りつかうとし、
思ひかへして急いで戸口より去る）

古町（横の方にさつきから言葉をかけようと
もぢもぢしてゐるが）おとり……よく來らつ
たな……お前は、まアほんに……

おとり あれ、古町のかか様ア……
喜平（前にさへぎり）おとり、まさか、おら
の顔、忘れたわけでもあんめえ……！

おとり あつはつはア、喜平さ！ お前相變ら
ず村中呑み倒してゐるのけえ？

喜平 何だ！ この輕尻ツ！
おとり おやおや、山影の先生も來てゐられる
よ……

山影（ニヤニヤ笑ひながら、ちらと見る）……

おとり（感じ入つたやうに）へえ、お前さん
は何て若えこつた！

山影（てれて、うつむき咳をしながら）ふん

……

おとり (おかに) 姉さ、お前も達者でいいでねえか？

おかし (不機嫌に) なに、いいことがあつたか！ お前も早くお終えになりてえと思つてゐるに、まだ息通つてゐるのよ。(横を向く)

古町 (おとりの袖に目をこすりつけて) へい、何つう美しい着物だべまア！ これ何てもんたえ……？

おとり あれまア、かか様、人絹だアよ……

古町 はアア。(と、くどく目をこすりつけ)

目が痛えやうに縞の込んだもんだなア……な
んぼかはア高えもんだべな？

おとり なアに、お前さん、こんなもの、ごまかしだわし、アツハハ。

古町 (なほもしつこく寄りそつて) こんなに立派なもんを着てまア、お前も大した身分になつたもんだア……お前さんと一生はア着れるこんでねえわえ……

おとり そんなに氣に入つたんなら、かか様に今度送つて上げますべよ。

古町 (感動して手をこすつたり着物をさすつたりして) へい、なんてなア、ほんに死ぬまでに一遍位え袖通して見てえもんだよ……

おとり (古町から逃れて) はア、この家もほんに久振りだが、成程まア、ひでえことになつてゐるもんだなア……

喜平 それがよ！ お前がはア小十年も顔を見せぬうちに、こんなあんべえになつただが、

おとり 姉え、おらがあとでゆつくり話すだ。な、婆さま、福の神が舞込んだらしいで、相談に乗つて貰ふべいよ。

おかし …………… (つと立つて瀬戸口に行きかける)

古町 婆さまもほんに運が来ただぞ。

おとり ハツハツハア、そんなに買ひかぶられては、おら迷惑だぞえ。たかが女工あがりではなア、この大屋根をどうしやうもねえわし……どれ、お線香を立てて。(と奥へ去る)

喜平は追つて行く

おかしは無言のままひどく嫌な顔をして瀬戸口より去る。

古町 (山影に低聲で) 大分、あの女子持つてゐるらしいぞ。……魂消たなえ。

山影 ふむ、あの飯炊女……うむ、人の運で解んねえもんだ……あの物腰ぢや、千や二千であるめえ……奴つ子、何かふとい鴨でもくはへやがつたかな。

古町 そだ。きつとそだ。……先生、こんでは、お前達も、だるま屋の勘定を早まつたぞ。あの女子が来るやうだら、もつと待てばよかつたに……(残念さうに愚痴る)

山影 さア……まアどんなものか……よく様子を探つて……あいつは、昔から食へない女子だで……しかし……(考へ込む)

古町 (熱心に) なア山影さ、これは、ちつとおら方で考へなほしたがいいだぞ……

山影 何を考へなほすだな。

古町 そりや、お前さんの方が學者だで、うまく考へるべき……。おら實は、婆さま相手だで、仕方無く喜平を中に立てて、手を打つちまつたが……萬三郎ははア歸る見込は無しさ……。んだがおとりがああして豪勢な金面して現はれたとしたら……なア山影さ、お前だつて、ぼろ馬だの、古疊だのつて、なにも欲しいわけなかんべえ？

山影 (ニヤニヤして) かか様も、なかなか智慧が廻るなア……

古町 (あわてて) ……おら……何も解んねえだ……かういふ時は、お前さんに頼るほか仕方ねえぞし……？

彌五がひどくせかせかしながら入つて来る。

古町は急に話を止める。

彌五 小母はどこさ行つた！ 小母ア！

喜平がおとりの荷物を取りに現はれる。

彌五 へつ、喜平兄にや、せいぜい小母の機嫌をとつてゐやがれ……(低聲で) おい、おら今に見てやろ、畜生！ 羨ましがるでねえぞ！ うへつ、ちゃんとおら、この胸の中にあるだ！ 畜生奴！ (高聲で奥へ) 小母ア！ 小母ア！ お前直ぐ、墓参りに行くだなア！ さうだなア！

おとり (奥で) バカだよ、この男は。十三日は墓参りと決つてゐるよ！

彌五 (有頂天に合點し) ようしツ！ 尤もだ！ おらと一緒に行くべ！ なア、おら、ちつとお前に話があるだよ！ いいな、おら

……

今直ぐ支度ぬいで来るでなア、小母ア——
 (喜平に勿體ぶつて) うへ! おい、話はあ
 とでな……(と思はせぶりながら去る)

喜平 何を言つてけつかる、この乞食野郎!

おとり (呼ぶ) 喜平さ、早く荷物をこつちへ
 運んでくんねかい!

喜平 おい来た! (と荷物を持つて奥へ去る)

古町 (奥へ) おとり、あとでゆつくり話しに
 来てくんせよ!

おとり (奥で) ごめんなんしよ! あ、山影
 の先生、おれ、お前さんに話があるだで……

いやゆつくりにしへえ……

山影 (嬉しさを隠して) うむ……?

古町 (聞きとがめ) ほう、先生、あの話にな
 るべよ……きつと。おとりの話つて言ふのは

な……頼みますぞ、おらの事もなア。

山影 (ぼそぼそ) そらア、てんでにやつた
 方が、きき目があるだな……

古町 ええ、お前さんは我利々々なアほんに
 ……男はこんな時、ほんにいいこんだ……ほ

れ、おとりは昔から男に甘えしな……。それ
 に、お前さんだつて、あの女子にかまつたこ

ともあるべ? え? (色つぼく) きつとう
 まく行くだよ! な、たのむと言ふに……

山影 (出がけに、ふつと銃を仔細あり氣に抱
 へ) バ、バカな……(去る)

古町 (くどく言ひながら山影を追つて去る)

おとりと喜平、奥から話しながら出て来る。
 おとり 漸つとあの犬奴等歸つて行つたな。

喜平 いや、おらもひでい苦勞しただよ。あの
 有象無象を向うに廻して、一人でおら頑張つ

ただかんな。何せ一文無しの婆さまを、裸に
 して何んでもかんでも、破れ障子までひつば

がして行きやがるだでな……

おとり なるほど、あんな奴等には破れ襦袢やボ
 ロ疊で結構だよ。お前にしちや上出来だ。ア

ツハハハ。

喜平 (得意氣に) いや、おらだつて婆さまに
 頼まれたからには、やることはちゃんとやる

だ。お前にもおら、よく見て貰ふだ。この
 通り、うまくまとめて追拂つただかんな。全

くよ。おら慾のどくの話でねえだぞ。婆さま
 がそれはよく知つてるだ……

おとり 呑むしか能無し男だと思つたになア:

……

喜平 いや眞面目な話だで! おとり姉! お
 ら、全く今度は、われの腹切つても……

おとり ハツハハ、解つてるだよ! (紙入を
 出し) それ、お盆の飲代……

喜平 (目を睜つて、とんきよに叫ぶ) あれツ!
 これ十圓!

おとり 酒代に足んねえだかい? 呑んべい男。
 喜平 と、んでもねえ! (と狼狽てて帯に

ぐるぐる巻きにしてしまひ込む)

おとり お前にはこれからさんと頼みがあるだ。
 損にはならねえべぞ! まアおらの片腕にな

つて貰えてえだよ。
 喜平 (有頂天に) いいとも! くそ、おら何

でもやるだ!

おとり んでは、早速、伊山へ行つて掛合つて
 来てくんせ。かういふだ。おとりが来たで、

あとでお願ひがあるから、だるま屋の家は、
 あと五日間このままにして下せえ。

喜平 よし! 野郎文句たれたら、このおらが
 きくか! 畜生奴、何しろお前、今日中に婆

さまに立退け、一日も今度は猶豫ならねえと
 ぬかして、婆さまをせつきやがつただかんな

いや全く、いい所さお前が来たものよ。婆さ
 まは、馬小屋さ引越すわけになつてゐるだ。

こいつがおらの力でどうにも出来ねえ關所だ
 つたのよ。尤もはア三ヶ月も催使食つたで、

これ、のつびきならねえのよ……そんで……
 おとり まアその話はどういいだよ。早く行つ

て來せえ。

喜平 お、承知だよ。斯う效き役者が揃つては、
 伊山の業つたれも手が出ええよ。そんで、五

日間待てと言へばいいだな。それからお前に
 何か考へがあるだな?

おとり あるだよ。
 喜平 そか! そか! 畜生、斯うなつたら、

おらも野郎に、ぐうの音も出させねえでくれ
 るだ。

喜平 は急ぎ去る。おとりは今更に家の中を
 見渡して考へ込む。

おかじが出て来る。おとりに見向きもせず
 に、風呂敷を出し、そこらに散らかつてゐ

るぼろや流しの鍋釜などごたごたと包み始

める。

臺所に暗い電燈が灯る。

おとり 姉エ、何をまたごた始末してるだよ。

おかし にしこそ何を嘆きつけてやつて来ただ。

悪いあんべいだが、だるま屋は見かけの通り

よ。にしのこつたから、どさくさまぎれに、

何かうめい汁でも吸ふつもりで来たか知らね

えが、せつかく汽車賃かけて来て、氣の毒だ

な。人のもの笑ひにならぬうち、さつさと歸

つた方がよかんべぞ。

おとり ハツハハ、さう目の敵にしねえでもい

いわえ、何もお前のお前の生血吸ふわけねえ

からな。氣をもむことはねえぞ。

おかし にしがそんなしやらしやらした装をし

て、おらの目を欺さうたつて駄目なこつた。

ほかの奴らは、くらまされるかも知れねえが、

……なに、にしが眞當に世渡りしてそんな装

出来ようわけがねえわ。泥棒稼業でもしねえ

ではな。

おとり 婆ア、おらが泥棒してるだぞ？

おかし 泥棒根性は、にしが生れつとからだ。

村中に聞いて見る。誰一人知らねえもんはな

ないわ。にしがその目付を見る。人に事があ

つたら、首をつつ込んで、うめえことをする

こんたんだ。昔つから分つてるだぞ。

おとり 寝言言ふでねいぜ。おかし姉。おらの

身装を羨むも好いだが、あんまり悪たれつく

と、お前の身のためにならねえな。

おかし 喧し、死んでもにしが世話にならねえ

から心配すんな。いいから早くこの家出て行

くこつた。この家はだるま屋の家でねえだか

らな。よく言つておくが。——この前、父つ

さまが死んだ後始末の時、にしはこの家半分

おらのものだ。死んだ兄が遺言しただから

よこせなんて村中大だこねて、外聞さらし

たのをにしは、はや忘れたか。おらにしの悪

黨面を見ねつて、一生涯忘れねえがにし。見

ろ、あの時のうぬの暴れやうは、警察騒ぎま

でしやがつて、そんでおらも村の悪後家にさ

れた。見たくもねえ。この家さ歸つて来る時

は、にしはきつと悪計み考へて来やがるだ。

ふん、悪いあんべえだな。おかし姉の身上は、

これ、この鍋釜だけだよ。お前が何ほねらつ

ても、はアこの家屋敷は他人の持ものだ。

(ニヤニヤ笑ふ)

おとり へつへへ、そんなことは昔の寝言よ。

そりや、あの時分は、おらもたかが鑛山の飯

炊女子だつたで、行末のこと考へて無理も言

つたさ。だが、お前も執念深え女子だ。乞食

同様になつても、未だそんなことを根にもつ

てるだかい？ そんなグスな子簡だから、家

屋敷まで人に取られちまふだ。おらを見ろま。

そんなことはきれいさつぱり忘れてゐるだ。

おらが歸つて来たのは、そんなことでねえ。

お前や萬三郎の、ためを思つて駄けつけて来

ただぞ。

おかし (嘲笑的に) ふん、金持になつたで、

この家を取り戻してくるつて言ふだが？…

：小泥棒の成上りの百や二百で、ちのあく

話でねえべぞ。大口叩くもんでねえ。にしに

頭下げる位なら、伊山の金貨におつとられた

方が、氣持がいいだよ。くそ奴、死んだつて

うぬの世話にはなんねえぞ。よく斷つておく

がな。面でも洗つてから出て来う。

おとり (始終ニコニコして) そんでは、お前

はその鍋釜背負つて、どこへ行くだよ。もの

貰ひにでも歩くのけ？

おかし それもよかんべなア。

おとり 瀬戸の馬小屋で、息引きとるんだと

な？

おかし そとも。にしがよな悪黨にピクピクし

て、氣をもまねえだけでも、馬小屋の方が、

なんぼはア氣がせいせいするか知んねえさ。

これからは、おらも、金貸共におどかされる

心配も無し、はア極樂だ……え……？ (風

呂敷を背負つて出て行かうとする)

おとり 姉エ！ だるま屋が落ちぶれたのも、

お前のバカなせぬだぞ。そんで、おかしが、

だるま屋の瀬戸の馬小屋で、生恥さらすだか

鼻つ先で、吾が家屋敷を他人に踏んづけられ

て、だるま屋の先祖に赤恥かかせるつてか！

おかし 喧しッ。にしが世話にはなんねえから

心配すんなつて言つてゐるでねえか！

おとり (たまりかね) この乞食婆ア！

おかし だるま屋の血統が乞食や、それ、盗人

に成り下がつたら、そんで文句ねえべによ…

おとり 姉エ、ま、ここさ来てくんろ。おらお前に言ふことがあるだ。

おかじ ええ、おらに構ふことねえわ！

おとり 姉エ、萬三郎が歸つて来るだぞ。南洋から、ほらちゃんと手紙が來てるだ。もはア三ぶは船さ乗つただよ。

おかじ (初めて振戻り、ちつとおとりを見すゑ) にいや、おらを未だ、いぢめ足りねえだな……？

おとり ええ、いい加減にするもんだ。萬三郎が歸つて来るのは本當だ。おらに詳しく書いてよこしただかな。

おかじ 何で、にしがやうな者に、三ぶがたよりするだ。……(口惜しさうに) あの野郎！おとり (勝誇つて) まアおらを叔母と思つて頼りにしてゐるだ。始終おらに手紙よこすだ……それにはそれで、また三ぶにして見れば……いろいろ考へもあるこつたべよ。

おかじ (激怒して) あの能無し野郎が！人もあるに、おとりなんどにたよりするだと！おとり 能無し野郎だつて、人を見る目は持つてるのさ、腹にちゃんと、心懸けをもつてるのさ。おらも今度は、三ぶの心にはだされちまつたよ。

おかじ ちよつ、三年も親を放つたらかして置きやがつて、村の恥さらしにして置きやがつて……(涙をのんで) そんで何んだちふだ。何しに歸つて来るちふだ。(皮肉に) 金の小千も溜めて、この家を取り戻すつてか……

(じりじりとおとりの目をのぞく)

おとり (氣をもたせて) まア、三ぶだつて、何かそこに、一腹出來たればこそ、はるばる歸つて來る氣になつたちふわけだよ……

おかじ (急に目を光らせおとりの睨めつけ) ははア、うぬの黒い腹、そんでのみこめた。畜生！うぬのうぬは、三ぶを手なづけてゐやがつただ。三ぶのバカをだましくらして、生血吸ふ了簡だ。そんでここさ出張つて來やがつただ。——解つた！こん畜生、どこまで餓鬼だか！うぬツ、ただおかねいだぞ。おらいつまでだるま屋の嫁でねえぞ。うぬらに甘く見られて堪つか！(益々激昂して)

この泥棒颯ツ！うぬが芝居を、ぶてるならぶつて見る。三ぶにたかつて金でも盜めるなら、盗んで見ろツ！おらの目の黒いうちは、うぬに三ぶをなめさせておかねえぞ！

おとり まアまア、さうお前が早のみ込するのは早えわい。三ぶが戻つてから、力むがいいよ。まうぐいしてけつかるだ！

おかじ (つと寄つておとりの着物をやけに引つかき) こんなちやらちやらしやがつて、人の目をくらます氣か！こんなものなんだ！(おとりの襟をひつたくり) 裸になりやがれ

ツ、それ、飯炊女子の地が見えるわ！おとり (力まかせにおかじを突飛ばし) 何するだ！この狂ひ婆ア！

二人は暗い電燈の下で、息をはずませてちつと睨み合ふ。

しばらくの間。

喜平が嗚りながら、暴れるおしを抱へて入つて来る。後ろにおしまの娘、お咲とお君が泣きながらついて来る。

喜平 そらツ、こん畜生、世話を焼かせやがつて、そらツ。(とおしを爐端に倒す)

おとり おや？おしまだ。何をおつぱじめたんだえ、この寢小便餓鬼は……？

喜平 いやはや、あきれた女子だ。伊山の座敷さ上がり込んで、大暴れしてけつかるだよ。伊山の旦那、青くなつてふるへてゐたもんだ……

おしま あのうらなり南瓜野郎、おら蟲が好かねえ、算盤と抱き寝してけつかる、おらの話をききやがらねえ。ちんちくりんのくそ蟲野郎！

おとり やれ、やれ！うんと脅かしてやれ、おしま、さういふ手は、このだるま屋の先祖からのおゆづりもんだ。そいつは上出來だアよ。アツハハハ。

おしま 何ツ、きいた風なこと言やがる。……お前はとおとり婆アだな？

おとり おらよ。小十年も會はなきや、おらでも婆アになるべえさ。お前が歸つて來てるとは氣がつかなかつたよ。

おしま 歸つて來たが悪いつてか！おとり うん、なかなか悪たれも修業したやうだよ。だが、未だ駄目だアで、おとり叔母にわたり合ひは出來ねえわ。

おしま しやらくせえ！ 手前とわたり合つて一文にでもなるかよ！（急におとりをじろじろ見つめ）へーい、豪勢な装してゐやがな。鑛山持ちのでれ助でもくはへ込んだのかい。……うむ、小母、仲直りだ。小遣呉れ。（手を出す）

おとり ま、さう手安くは行かねえわさ。

おしま ちエツ、しみつたれ！ ぢやよし！

手前とは生涯仇だぞ！ 覺えてゐろ！

おとり アツハハ、泣きべ、そかかねえでもいよう。

おしま 喧しツ、この飯場の淫賣奴！

おとり よしよし、今にもつと仕込んでやるよ、アツハハ。——喜平さ、どうしただよ。ぼかんとして……

喜平 んだつてお前、伊山の話がよ、こののんべ女子のおかげでめちやめちやだよ！

おとり んならいいさ。おら今夜にでも行つて、おやぢの腰つ骨しめつけてやるで……へえ、これはどこの子だい？

喜平 この、おしまの娘だよ。

おとり おや、これは上出来だよ。おしまの娘にしちや……柄に無えわさ。

おしま 小母、お前は子持たすだらう。一人位やつてもいいぜ、いや二人共やらアな。

おとり お世辭を使ひやがるな。

彌五（飛込んで来て）小母ア、さ、行くぞ！

おとり よしよし。子供達アおらについて來な。

のんべおつ母なんだ、構ふことねえ……。

（子供達怖づ怖づつて行く）

喜平 な、伊山の野郎カンカン怒つてゐるでな、文句あるなら、金揃へて來うと言やがつたよ。（おとりについて行く）

彌五（話をさへぎり）小母ア、先つきも話したがおらの馬な、二十圓なら賣れるだ。そんであとその馬さ、五十圓ぶてばな……全く……

おかじとおしまを残してみな去る——

おかしは風呂敷包を背負つて、鍋などさけて、むつとりとして瀬戸口から出て行く。

おしまは流し場へ行き水をがぶがぶ飲む。

第二幕

第一幕と同じ場面。

あたりのものはさつぱりと片付けられてゐるが、ガラんとした感じである。

爐端には、郷土の實の細工物だの、ババイアの實だの、南洋の土産品が置いてある。

夜——

爐端で薄暗い電燈の下に、萬三郎（四十歳位、體格のがつしりした南洋焼けた黒い顔の男）と、おとりが札束や銀貨を前にして、それを見守りながら緊張した面持でかしまつてゐる。

萬三郎は息を殺して、おとりが紙幣を數へ

る手付をぢつと見つめてゐる。おとりは沈んだ聲で金を勘定してゐる。その手は少しふるへてゐる——鋭い光つたおとりの眼が時々萬三郎を覗む。

おとり（數へながら）……八十、九十、百……、これで五百圓……五百とこれ五百と千圓……

萬三郎（固唾をのみ深く息を吐いては唸る）

おとり ……あと、十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、九十の……百……と、

百と十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、九十の百……これで二百……二

百の……ここに五十で二百五十、二圓五十錢……（ハツと息をつき）こんで、それ千二百

と五十二圓五十錢……と……

二人ししばらく沈黙——

おとり 間違えねえな……こんで……

萬三郎（緊張の餘り喉をつまらせ）はア、間違えねえだ……確かに……（溜息を吐く）

おとり（眞剣に）なア三、ぶ……おら何度も斷つておくだが……おらの身上で……これだけ

の大金を腹に巻きつけて、上州から來るには、ほんに並大抵の決心ではねえだぞ。——おらはただの機織女子だぞ……そこをようつく貴

様、のみ込んで居て貰えてえだ。……ほんに、にじがために、この金を持出す迄のおらの覺

悟はよつほどのことだぞ！

萬三郎（感極まつて鼻をすすり）小母、解つ